伊丹公論

復刊
第11号
通巻30号

発行所
伊丹市立図書館ことば蔵
〒664-0895
伊丹市宮ノ前3-7-4
☎072・784・8170

編集
伊丹公論編集委員会

児童らにことば文化浸透

特区認定から10年、徐々に成果

国民の活字離れ、読解力・文章表現力の低下が指摘されて久しいが、本市は今年3月31日、「ことば文化都市」標榜10年の節目を迎える。言葉に関する独自の授業の実践など本市で展開されてきた諸施策は成果を挙げたのか。

本市が、文部科学省の「『読む・書く・話す・聞く』ことば文化都市伊丹特区」に認定されたのは平成18年（2006）3月。

「伊丹には、ことば文化の豊かな伝統がある。ことば文化都市を掲げてまちづくりを進めてみてはどうか」。日本3大俳諧コレクションの一つである柿衛文庫で長年、俳諧塾を主催する俳人、坪内稔典さんの提案が特区申請に結びついた。前年には国民の深刻な活字離れを受け「文字・活字文化振興法」が制定されていた。本市の小中学校でも、「自分の考えを言葉で表現することが苦手な子が増えた」「むかつく、きしょい、など限られた言葉ばかり多用する」といった報告が相次いでいた。

このような状況の中で坪内さんが注目したのが、本市の歴史と伝統。江戸時代に日本一の酒造りのまちとして栄え、その豊かな経済力を背景に京や大坂から多くの文化人が訪れ、俳諧文化が華開いた。柿衛文庫には、芭蕉ら名だたる俳人の真筆資料などが多数所蔵されている。

「ことば科」授業でキャッチコピーを考える子どもたち＝1月21日、花里小学校で

同特区の認定を受けたことにより、市教育委員会では学習指導要領外の授業が可能となり、小学校で「ことば科」、中学校で「グローバルコミュニケーション科」、市立高等学校で「ことば文化科」の授業を開始。特区は平成20年に廃止されたが、これらの授業は教育課程特例校の位置づけにより継続されている（中学校は平成23年度末で終了）。このような授業は全国でも珍しく、教育関係者の視察が今も絶えない。

また、「伊丹・本の杜ことば蔵まつり」を開くなど「ことばと読書を大切にする教育」を推進している。

一方、市でも著名人を講師とした「ことば文化講演会」を開催するなど言葉の大切さや豊かさを学ぶための事業を展開している。

市教委の太田洋子・学校教育部長は「まだまだ完成ではありませんが、子どもたちの姿から大きな手応えが感じられます」と話している。

授業で楽しく言語感覚磨く

伊丹市立小学校では3年生から6年生までのすべての児童が、独自教科「ことば科」を週に1時間学んでいます。

ある日の花里小学校6年生の教室。「キャッチコピーのひみつ」と題し、伝えたいことが効果的に伝わるキャッチコピーを作る学習をしていました。

先生がテレビのコマーシャルに出てくる有名なキャッチコピーなどを「五七調」「だじゃれ」「対句」などにジャンル分けしながら例示し始めると、子どもたちは、たちまち授業に引き込まれて行きます。

その上で先生が「この学校のキャッチコピーを作ってみよう」と呼びかけると、子どもたちは学校の特徴を次々に指摘し、「あいさつの花咲きほこる」「小さな学校大きなあいさつ」など自分たちで考えたコピーを班ごとに競って発表し合っていました。

ことば科では、俳句や詩などの暗唱、ディベートを実施するほか、「おとなりさんを紹介しよう」と題して友だちにまつわるエピソードを取材して発表したり、「浅葱色（あさぎいろ）」「茜色（あかねいろ）」といった、日本に昔から伝わる美しい色の和名を学んだりしています。

ことば科の授業は、大多数の子が楽しいと感じており、毎週授業を受けることで文章を書くことが得意になったり、話し合いが上手になったりしています。

とりわけ、俳句は、どの子も目に映る自然を季節感たっぷりに作り上げることができるし、百人一首では、伊丹のどの子にも、お気に入りの一首があるはずです。

言葉をより身近に感じ、キラっと光る言語感覚を身につけてきた伊丹の子どもたち。作家やジャーナリストなどが続々と輩出される日もそう遠くないかもしれません。

（市教委学校指導課　廣重久美子）

「粘り強く続けることが大事」発案者・坪内さんアピール

「ことば文化都市伊丹」の発案者である坪内稔典さんに話を聞いた。

―そもそも言葉を伊丹のまちづくりに活用しようと思われた理由は。

「言葉は目立たないですが、自分の世界を開いてくれる大切なもの。私たちの暮らしの基本なんです。幸い、伊丹には柿衛文庫という、ことば文化の貴重な財産がある。これを使わない手はないと考えたんです」

坪内稔典さん

―「子どもエコ俳句大賞」など、全国や近畿の小学生を対象とした俳句コンクールで、伊丹の小学生が数多く入選していますね。

「小学校で『ことば科』の授業が熱心に続けられてきたのが大きい。子どもたちにも少しずつことば文化が浸透してきていると感じます。伊丹の子どもたちの俳句は、どれも生き生きとしてすばらしいですよ」

―今後どのように取り組んで行くべきでしょうか。

「ことば文化というものは、すぐに成果に結びつくものではありません。しかし、どこかで効いてくるものなので、地味であっても、粘り強く続けていくことが大事です。子どもに絵本の読みきかせをしたり、家族で夕飯の後に句会を開いたりするのもいい。家族の日常の中で言葉を大切にし、それを続けていくことで、ことば文化は次の世代へと受け継がれていく。そして、その力が将来大きく発揮されるのです」

＊　＊

言葉がまちをつくり、人をつくる。ことば文化がさらなるまちの活性化や、人が成長する土壌づくりにつながっていくことが期待される。

再び名声を得た伊丹の銘酒

北の大地で世界を魅了する「男山」

本紙は復刊2号から9号まで計8回にわたり、「白雪」「老松」という江戸期から続く銘酒の蔵元社長の寄稿により清酒発祥の地・伊丹の酒造りの歴史を紹介してきたが、伊丹には他にも、銘柄が多数存在した。日本一の生産地の地位を灘に譲るなか、その多くが消えて行ったが、中には別の地に移り再び名声を得たものもある。そんな銘柄を今号から順に取り上げたい。その第1弾として、「男山」を紹介する。

清酒「男山」＝男山酒造り資料館（旭川市）で

もともと男山は、江戸時代初期の寛文元年（1661）に近衛公が伊丹領主となり清酒醸造を奨励したころ誕生したとされる。名前の由来は、清和源氏の流れをくむ伊丹の蔵元、木綿屋山本三右衛門が、「男山八幡宮」（現在の石清水八幡宮、京都府八幡市）にあやかり、清和天皇が宇佐八幡宮から神霊を移し祀った由緒ある社の霊験を授かるべく命名した。

▼「男山」の繁栄と衰退

このころ、伊丹の蔵元たちは領主の手厚い保護の下に上質な酒を造り、まさに破竹の勢いだった。元禄10年（1697）には、山本家は江戸幕府から名字帯刀を許され、男山は白雪や老松などとともに官用酒となり、「御免酒」と称された。男山は銘酒の代名詞となり、浮世絵師の喜多川歌麿や作家の井原西鶴、近松門左衛門など酒にうるさい文化人もうならせた。儒者の頼山陽は、この酒を飲みたいために10年もの間、伊丹に滞在したと言われている。

だが名声をほしいままにしていた男山も、江戸後期からの灘の酒ブームに押された末、天保2年（1831）の奥州米大凶作による打撃を受け、明治初めには廃業に追い込まれた。他の伊丹の蔵元も次々と倒産していった。

その際、男山の銘柄は切り売りされ、全国各地に「男山」を名乗る蔵元ができたとされている。

▼北の大地で再び花開く

時は流れ明治32年（1899）、伊丹から遠く離れた北海道旭川市で山崎酒造が創業、自社の清酒に「男山」を冠した。「寒造り」（低温長期発酵）に適した寒冷な気候の下、大雪山連峰の万年雪に発する伏流水を仕込み水に使い、うまい酒を生み出した。

その技術力と酒造りへの熱意を認めた山本家の末裔が、昭和43年（1968）、山崎酒造の山崎輿吉社長に秘伝の製法や商標、印鑑、古文書等を譲渡した。

これにより山崎酒造が当時全国に10余りあった「男山」ブランドの正統を継承し、社名も「男山酒造株式会社」に改めた。

原料米の品質にこだわって造られる男山は、その後国際酒類コンクールなど世界最高峰とうたわれる酒類コンクールで39年連続入賞を果たしている。

かつての伊丹の銘酒ブランドが、遠い北の大地で再び銘酒の地位を確立したうえ、世界からも脚光を浴びている。

「郷土研究伊丹公論」は、私立伊丹図書館を開設した小林杖吉（筆名「丹城」）が、昭和11年（1936）1月20日に創刊し、19号まで発行された地域紙。ことば蔵では、伊丹公論を73年ぶりに復刊し、伊丹の歴史・文化を全国に発信するため、市民と共に発行しています。

たみまるレモンの洋菓子開発

市立伊丹高校商業科の生徒たち

商品を手にする商業科の生徒（右からクッキー、ドーナツ、ゼリー）

市立伊丹高等学校商業科がこのほど、伊丹市東野産のマイヤーレモン（商品名「たみまるレモン」）を使った洋菓子を開発、魅力的なパッケージを作って伊丹の土産として販売することを計画している。

同校商業科は、「実学と資格取得を基本としたアクティブ・ラーニング（体験型学習）」をコンセプトとし、3年前から商品開発、商店経営実習、インターンシップ（就業体験）などに取り組んでいる。中でも商品開発は、教科書で学んだマーケティングの基礎を実践する場であり、地域研究をもとに伊丹の土産品として愛される商品作りを目指している。

今年度は、3年生の課題研究という授業で模擬会社を創立。その中の「企画・開発部」に所属する生徒がたみまるレモンを使った商品を企画し、市内洋菓子店の協力を得てゼリー、ドーナツ、クッキーの3商品を完成させた。見た目を工夫し、ゼリーは上層部をクラッシュゼリーにして瑞々しさを表現、ドーナツはホワイトチョコレートを網目状にたっぷりとコーティングし、爽やかさを演出した。また、3商品ともたみまるレモンの爽やかさが残るよう甘さを抑えるなど味にもこだわった。

開発した商品は、昨夏に商店経営実習として伊丹郷町館旧石橋家住宅の一角を借りてカフェを2日間開店し、そこで販売した。幅広い年齢層から好評で売れ行きは上々だった。

伊丹土産として販売計画

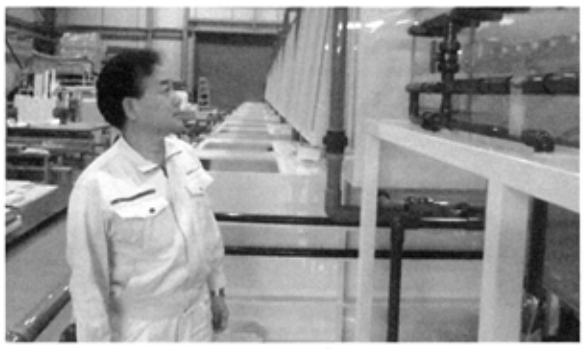
現在はドーナツのパッケージを開発中。過去に開発した商品のパッケージはいずれもビニールだったが、伊丹の土産品として愛されるためには「魅力的なパッケージ」も必要と考え、生徒たちがアイデアを出し合い、試作に取り組んでいる。そのうちの一つが、ドーナツの商品名「黄色い花火」にちなんだ、打ち上げ花火の筒を模した箱。他にも市内企業の協力を得て試作しているものがあり、実際に販売できる日が待ち遠しい。

生徒の考える機会を奪わないように、教師はできるだけ口を出さないよう心がけている。そのため生徒同士の意見のぶつかり合いもあり、模擬会社の運営には生徒たちもかなり苦労しているようだが、この体験型学習を通して生徒自身の成長につながれば、と願っている。

（市立伊丹高等学校商業科長　浦門義人）

がんばる町の企業

株式会社 シンワ



われわれ消費者にはなじみが薄いが、時代の最先端を行くエレクトロニクス関連の製品を作る機械（製造装置）を作っている。

半導体製造装置、フラットパネルディスプレー（FPD）製造装置、電子精密部品製造装置、写真製版製造装置といったものだ。これらの設計から製造、据え付けまでこなす。蓄積された確かな技術を持ち、名の知られた大手メーカーからの受注が多い。

町工場で最先端の技術を

工場を訪ね、目に留まったのが、ガラスや金属を処理するための化学薬品のタンクを製造する過程での溶接作業。溶接につきものの火花が飛んでいなかった。

その理由は簡単。普通の溶接は金属同士をくっつけるが、タンクの材質がプラスチックであるため、熱風で溶接棒を溶かしプラスチック同士をくっつけるからだ。仕上がりの美しさや強度などは職人の腕で決まるという。

業界では当たり前の技術らしいが、自分には興味深い光景だった。火花が飛ばず床が汚れないこともあって、工場の中は清潔感にあふれている。

吉積浩社長（55）は、「大きく手を広げず確実に仕事をこなしながら、階段を一歩ずつ上って行く経営方針を貫いていく」と話していた。

（細尾哲也）

伊丹市森本1丁目117番地1
電話　072・770・1811

交差点での偶然

第3回日本一短い自分史 大賞に亀岡市の前田さん

ことば蔵はこのほど、「忘れられない大恋愛」をテーマに「日本一短い自分史」の作品を募集、大賞に京都府亀岡市の高校教師、前田哲さん（57）の作品「交差点での偶然」を選んだ。

前田さん夫妻

日本一短い自分史の募集は平成25年度、26年度に続き3回目。今回は昨年10月1日から募集し、市内外から計60点以上の応募があった。

審査員は伊丹大使の坪内稔典・佛教大名誉教授、永吉雅夫・追手門学院大教授、中周子・大阪樟蔭女子大教授の3人。前田さんには賞品として3千円分の図書カードが贈られる。

前田さんは「人が出会う時には、多かれ少なかれ、偶然が重なると思います。私らの場合は、たまたま交差点だっただけ。不思議な出会いは誰にでもあるのでは」と話していた。

秀作入賞者は大阪府枚方市の木口公（きぐち）さん、神奈川県相模原市の池田礼子さん、兵庫県加西市の齋藤恒義さんの3人。

大賞作品の全文は以下のとおり。

◇　◇

今から二十年ほど前のことではあるが、現在の家内と付き合っていた時のことである。歳の差はあるが、何故か気が合った。家内は山口から出て来て専門学校に通っていた。私の方は高校教師をしていた。ウィークディを楽しみにデートを重ねた。順調に付き合って三年がたったが、結婚のことはまったく考えていなかった。私は浮ついた気持ちを持ち続けていた。

夏の暑い日であった。たまたま、昨夜の宴会で出会った女の人と意気投合し、次の日、一緒に昼食を食べた。食べた後、手をつないで歩いていた。しかし、悪いことはできないものである。交差点で、信号待ちをし、信号がかわり、渡り始めた時、家内の姿が見えた。偶然にも家内が向こうからやって来たのだ。呆然となり、思わずつないでいた手を離したが、遅かった。二人の姿を家内にしっかり見られた。まずいと思ったが仕方がない。家内は知らぬ顔で、通り過ぎて行った。

その女の人とはすぐ別れて、家内に電話ボックスから電話した。今のように携帯電話がない。何度も何度も電話したが通じなかった。まだ帰っていないと思い、時間をおいて電話をかけ続けた。結局、その日、電話は通じなかった。次の日も電話に出なかった。

数日経つと、電話が通じなくなったので、家内のマンションに行ってみた。驚くことに引っ越しをしたという。私の前から消えたのは間違いなかった。私は振られたショックで沈み込んだ。後悔しても仕方がない。

夏が去り、秋にさしかかった。私は家内のことを思い続けた。家内がいかに大きな存在であったことか。

しかし、不思議なことが起きた。偶然にもあの交差点で家内と再び出会ったのである。よりによってこの場所で出会うとは思ってもみなかった。ここで逃せば二度と会えないと思い、一生懸命謝った。人目など気にしなかった。

熱意は通じて、再び付き合い始めた。そして、翌年の十月に入籍、二人の子どもをもうけ、現在の結婚生活に至っている。

郷土史こぼれ話⑪

荒木村重の遺児が異色の絵師に

今も輝く岩佐又兵衛

まだ記憶に残っている方もおられるのではないか。本市ゆかりの戦国武将、黒田官兵衛を主人公とした、一昨年のNHK大河ドラマ「軍師官兵衛」の一場面である。

元伊丹有岡城主、荒木村重（出家後は道薫）が、官兵衛の引き合わせで血縁の幼子に絵筆を贈り、抱きしめて別れを告げる。

その子は本願寺に匿（かくま）われ、長じて岩佐又兵衛（1578～1650）を名乗った。町絵師ながら、徳川3代将軍家光に招かれ、川越東照宮の「36歌仙図」（重文、仙波東照宮蔵）などの作品を残すまでになる。「山中常盤物語絵巻」「浄瑠璃姫物語絵巻」（いずれも重文、MOA美術館蔵）、「洛中洛外図屏風」（重文東京国立博物館）、「小栗判官絵巻」（宮内庁蔵）、「源氏物語野々宮図」（重美出光美術館蔵）など、日本美術史を席巻する。浮世絵の祖とする説もある。

乱世の戦国時代、織田信長に謀反した村重を父に、絶世の美女で「今楊貴妃」と言われただしを母として

その子は生まれた。そして己が運命を絵に叩きつけて生涯を閉じた。

中でも傑作といわれる「山中常盤物語絵巻」は、全長150（メートル）。凄惨かつリアルに母の敵討（かたきう）ちが展開される。父母の生涯から反逆の絵師とも呼ばれる。

一方「洛中洛外図屏風」は、3千人近い武士や庶民が一つになって太平の世を楽しむ姿が描かれる。端麗に、時には漫画のように描き上げた。

その異色の画家を、京都国立博物館が大々的に取り上げた。平成13年（2001）年のことである。荒木村重の出自に繋がる又兵衛の精神的遍歴を論じて展覧会の構成の骨子とした。表題は『ヒューマン・イメージ―われわれは人間をどのように表現してきたのか?―』。又兵衛はその中で大きく輝いたのである。

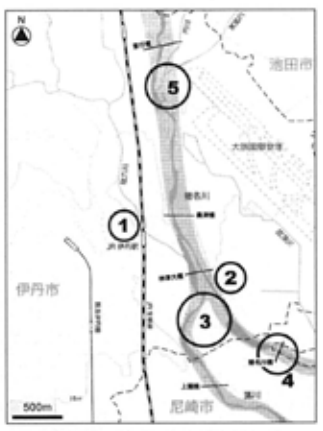
（郷土史研究家　森本啓一）

この印刷物は5000部作成し、印刷経費は1部あたり21円です。

しっかり生き続ける伊丹のヒメボタル

伊丹市は、高度経済成長期の昭和40年代後半から、急激に都市化が進み、身近な自然が急速に失われてきたが、まだ比較的良好なところもある。その証拠となるのがヒメボタルの生息だ。ヒメボタルは日本固有種の陸生ホタルで、兵庫県版レッドデータブックでは「要注目種」、生物多様性いたみ戦略ではBランク（市内で消滅の危機が増大している種）とされている。

左図は、これまで伊丹周辺でヒメボタルの生息が確認された場所の地図だ。①雲上（旧地名）は現在の有岡城跡付近。昭和48年（1973）にヒメボタルが大発生し、新聞各紙が大々的に取り上げ、多くの見物客が集まったが、翌年からは国鉄（現JR）伊丹駅周辺の再開発事業が始まり、やがてヒメボタルは消えた。



図．伊丹市におけるヒメボタルの生息地
1：旧地名雲上、2：口酒井春日神社付近、3：猪名川−藻川分派点付近、4：田能遺跡前猪名川河川敷、5：軍行橋下流の河川敷および堤防外側

地域住民の話によると、この付近では以前から街中でヒメボタルが見られたが、当時は誰もヒメボタルを知らなかったため、季節外れに飛ぶ変なホタルとされ「クサボタル」と呼ばれていたとのこと。

かの有名な江戸時代の伊丹の俳人、上島鬼貫は8歳の時に「こいこいと いえど蛍がとんでいく」という句を詠んでいる。

②口酒井の春日神社付近は竹林と草地だったが、近年開発されて住宅が立ち並び、ホタルが発生していた時の風景は全くなくなっている。

③④⑤はいずれも猪名川河川敷であり、ここには現在もヒメボタルが生息している。まさに猪名川は都市部に残されたヒメボタルの貴重な生息地だ。

③と⑤は国土交通省近畿地方整備局猪名川河川事務所が毎年ヒメボタルの幼虫調査をしている場所。⑤では、毎年5月下旬に猪名川流域ひめぼたるネットワーク主催で「いながわひめぼたるうぃーく」が開催され好評だ。

身近なところでヒメボタルが観察できる猪名川の自然はすばらしい。環境保全の大切さを考えるきっかけとなることだろう。（村上敦子）

現代人物風景

「一人ではない、仲間がいる」

写真協力＝西田写真館

伊丹市認知症等介護者家族会
「ほほえみの会」会長
森崎敏子さん（72）

「19年間、最後まで自宅で義母の介護を続けられたのは、家族会があったからこそ」。自らが会長を務める「ほほえみの会」の仲間たちへの感謝をまず口にした。

認知症の介護者家族の会「えくぼの会」が発足したのが平成3年（1991）。3年前からは寝たきりの人を介護する人たちと統合し、会の名を変えて再出発した。現会員は32人。

昭和63年（1988）3月、夫の赴任先・ドイツから、6年ぶりに帰国した森崎さん夫婦に当時78歳の義母が真顔で言った。「うちの息子もね、今ドイツへ行ってるんですよ」。明らかな認知症。重い内臓の病気もあった。11歳で実母と死別していた森崎さんは、最後まで精一杯お世話しようと、自宅に引き取った。そこから悪戦苦闘の日々が始まった。

風呂に入れるため服を脱がせようとすると、追いはぎにでも遭ったかのように激しく抵抗する。徘徊を繰り返し、市外の警察署から何度も呼び出された。おむつを替えないまま長時間歩き回って背中まで汚れた義母をタオルでくるむように連れ帰り、そのまま風呂へ直行したこともあった。気の休まる日はなかった。

まだ介護保険のない時代。認知症への世間の理解もほとんどなく、介護する家族の心身の負担は並大抵ではなかった。介護者同士で支え合おうと、当時認知症の勉強会に参加していたメンバーで家族会を結成した。

そしてこの会の存在が、それまで鬱々としていた介護生活を一変させた。一人ではない、仲間がいる—。

初めてショートステイを利用した日のことを鮮明に覚えている。介護疲れから森崎さんが体調を崩し、2日だけ義母を預かってもらうことにした。事務所のガラス越しに義母を見送ったとき「こんなところに義母を預けるなんて、私は人間失格ではないか」と自己嫌悪の念に襲われた。帰りのバスの中で涙が止まらなかった。バスを降りてすぐ家族会の仲間に「おばあちゃんを預けてきたの」と泣きながら電話した。全てを語らなくとも、同志だからこそわかり合える。まさに戦友だった。

義母は平成19年、97歳で亡くなった。介護は終わったが、家族会には関わり続けている。「自分の話を聞いてくれる人がいるだけで救われることがある。家族を介護している人たちが気軽に悩みを打ち明けられる、そんな場所を守っていきたいんです」と微笑んだ。

◇　◇

ほほえみの会
広畑3丁目1　いきいきプラザ内
電話　072・785・0860

郷土土産品紹介

百薬の長から生まれる酒造会社の酒粕食品

長寿蔵「酒粕ドレッシング」

老松「伊丹酒粕カレー」

酒処・伊丹では近年、酒粕（さけかす）を使った食品が次々に開発され、商品のラインナップが豊富になっている。

清酒「老松」の老松酒造本社（中央3丁目1番8号）では、レトルトの伊丹酒粕カレー（1袋432円）が評判を呼んでいる。酒粕が全容量の10％以上入っていて味がまろやかだ。

他には酒粕せんべい（1袋514円）や江戸時代の伊丹の俳人、上島鬼貫にちなんだ酒粕羊羹（ようかん）「おにつら」（1本1500円）も人気だ。

清酒「白雪」の小西酒造が経営する長寿蔵ショップ（中央3丁目4番15号）の売れ筋トップは酒粕ドレッシング（1本540円）。ほんのりと漂う吟醸の酒粕の香りと隠し味のワサビが魅力で、リピーターが多い。

また、吟醸アイスクリーム（1個378円）は吟醸の酒粕の風味が効いていて人気がある。すでにブランド化された白雪奈良漬も息の長い人気商品だ。

「飲む点滴」とも呼ばれる酒粕は、ビタミン、ミネラルなど豊富な栄養分が含まれている。今や有岡城跡や伊丹郷町館などを訪れたあと、蔵元に立ち寄ってオリジナル酒粕食品を買うのが伊丹観光のトレンドとなっている。

（細尾哲也、豊田政志）

老舗探訪

株式会社 水野楽器

伊丹市宮ノ前2丁目2番5号
☎072−782−2358

ことば蔵のある宮ノ前通りで昭和初期から営業。琴や三味線、尺八といった和楽器を中心に楽器全般を扱い、京阪神一円から来客がある。

明治23年（1890）、大阪市内で創業したが、昭和6年（1931）の経済恐慌を機に2代目・水野佐平氏のとき現在地に移転した。

佐平氏は、琴職人としての探究心から琴など和楽器全般の収集に情熱を注ぎ、わが国における楽器博物館の先駆者となった人物だ。昭和25年9月、猪名野神社東側に「丹水会館」を建てて和楽器を展示、演奏会や音楽教室も開き邦楽の普及に努めた。

大阪音楽大学、武蔵野音楽大学にもまとまった和楽器を寄贈、両大学内の楽器博物館開設につなげた。

琴は桐を主な材料とする伝統工芸品だ。店で琴職人を雇っていた時期もあり、店内は今も匠の雰囲気が肌で感じられる。

今の店主・白石英樹さん（54）は4代目。脱サラし、3代目の叔父から経営を受け継いだ。

琴の客層は高齢の女性や大学の箏曲部に所属する女性が中心。品質の良さはもちろん、修理などのアフターサービスも充実していて好評だ。

白石さんは、自身で琴を修理後、客から「いい音が出ますわ」と言われるのが何よりうれしいという。

全国の小・中学校の音楽の授業で和楽器の指導が行われるようになった。今後は学校の箏曲部の演奏会の後援をして地域に貢献していきたいとのことだ。

和楽器を愛する人たちの聖地は健在だ。

（豊田政志）

伊丹俳壇

「梅」　坪内稔典 選
（佛教大学・京都教育大学名誉教授。柿衞文庫也雲軒塾頭）

最優秀賞

梅咲いて眉毛一本軽くなる　和田 康（奈良市）

「眉毛一本軽くなる」がとてもよい。眉毛は梅の花蕊になった？ もちろん、軽くなったのは梅を見ている人の心身である。

優秀賞

梅一輪咲いて早速電話して　鳥越 世史子（伊丹市）

本日は天井日和梅咲いて　渡邉 美保（伊丹市）

梅香る皮一枚の老木の　中川 房子（山口県下松市）

もう梅が咲いていますと追伸に　屋部 きよみ（伊丹市）

泣かないと練習する子梅開く　諸星 千綾（京都市西京区）

次回の兼題は、俳壇・歌壇ともに「ことば」とします。応募はそれぞれ1人1作品、自作未発表作品に限る。応募締切は、4月30日（必着）。最優秀賞には図書券千円進呈。右のQRコードを利用すると、ケータイからも応募できる。問い合わせは、ことば蔵へ。

伊丹歌壇

「旅立ち」　尾崎まゆみ 選
（「玲瓏」選者。神戸新聞文芸短歌選者。現代歌人協会会員）

最優秀賞

ボストンと半泣き顔を連れていく「家出かよ」って笑う東京　佐々木 奈瑠（奈良県葛城市）

ボストンバックを提げて、半泣きの顔で飛行機に乗り込み東京へついたら、東京が家出かよと笑った。東京という街が笑ったりはしないが、共感できる。初々しさと、切なさと、威勢の良さが混じっているところが魅力。

優秀賞

旅立ちは見送れぬままひるまの光を集めてゐる猫の皿　有村 桔梗（新潟県見附市）

父は最後に大きく息を吸い込みて大地に潜くごと旅立てり　藤田 晋一（宝塚市）

旅立った冬鳥残す羽の帆を文書のように手のひらにとる　灣戸 もり（名古屋市昭和区）

湿原のわたすげの玉の白き波花穂ふるえて旅立つを待つ　福島 妙子（神戸市灘区）

居留守して旅立ちまえに絵描くわれを天窓に顔あり朝夢さめる　高橋 裕（神戸市東灘区）

タンジョー先生
はやしやよい

林やよい
伊丹市在住。毎日新聞兵庫版にイラストエッセイ「くるまいすまいる」を連載中。

躍進続く住友電工陸上部
――ニューイヤー駅伝に3年連続出場

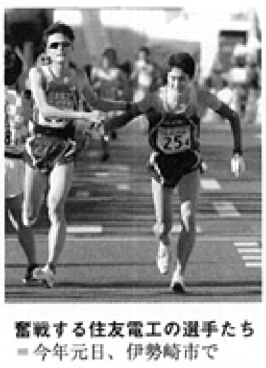
本市を拠点とする住友電工陸上競技部が今年元日、群馬県で開かれた、実業団駅伝日本一を決める全日本実業団対抗駅伝競走大会（ニューイヤー駅伝）に3年連続で出場した。

同陸上競技部は昭和3年（1928）に創部。住友総合グラウンド（瑞ケ丘2）を拠点に活動している。近年は、学生時代に陸上選手だった松本正義社長の積極的な強化策もあって選手の活躍が目立ち、昨年には各種目の成績をポイント化し合計点で争う全日本実業団対抗陸上競技選手権大会で初の総合優勝に輝いた。

ニューイヤー駅伝には、2年前に初出場、2年連続で25位の好成績を収めた。3回目の出場となる今年の第60回大会（43チーム参加）では、1区の竹澤健介選手（29）がトップと5秒差の5位で通過したものの、その後順位を落とし、最終的には38位という悔しい結果に終わった。

昨年まで早稲田大学の監督を務め、大学駅伝3冠などの実績がある渡辺康幸監督（42）は「1区の竹澤がうまく滑り出したが、チーム力の差が結果に出た。来期は有望な新人が加入するので、10位を目標にしている」と話していた。

同陸上競技部には長距離以外にも有力選手が多い。男子400メートルハードルの小西勇太選手（25）と男子400メートルの田村朋也選手（23）、女子100メートルハードルの伊藤愛里選手（26）は、今夏のリオデジャネイロ五輪への出場が期待されている。このチームからは目が離せない。


奮戦する住友電工の選手たち
＝今年元日、伊勢崎市で

俳人・歌人がその場で作品を選定
5月15日に「俳句短歌ライブ」

「ことば文化都市伊丹」10周年を記念し、「伊丹俳壇・歌壇」の選者である、俳人の坪内稔典さん＝写真右＝と歌人の尾崎まゆみさん＝写真左＝による「俳句短歌ライブ」を5月15日（日）午後1時から、ことば蔵1階交流フロアで開催します。

若手俳人・歌人が講師となって初心者でも簡単に作れる俳句・短歌のワークショップを開催した後、事前に応募があった作品とこのワークショップで作った作品を坪内さんと尾崎さんがその場で講評し、優秀作品を選定します。いずれも参加無料。当日直接、会場へ。

蔵出しニュース
「無意味ってどんな味？」
タイトルだけグランプリ 最高賞に石河さん

ことば蔵はこのほど、架空の本のタイトルの出来を競う「第1回タイトルだけグランプリ」の作品を募集、最高賞（田辺聖子名誉館長賞）に埼玉県所沢市の学生、石河大典（いしこだいすけ）さん（20）の「無意味ってどんな味？ 現代の食育問題の回答がここに！」を選んだ。

田辺聖子さん、宮本輝さんという二人の芥川賞作家が市内に居を構えることから企画。自分で考えた架空の物語のタイトル（10字以内）とサブタイトル（20字以内）を募集した結果、全国から947点の作品が集まった。

最高賞の石河さんは「ストーリーを想像していたら、ひらめいた。いつか、このタイトルの本を書いてみたい」と話していた。他の入賞者と作品は次のとおり。

【田辺聖子文学館賞】横浜市、富松実さん（36）「2月29日 もういいだろう。忘れる事を許してくれ。」

【宮本輝ミュージアム賞】広島県福山市、中常克彦（なかつね）さん（40）「大仏さまの寝ぐせ まさか!?本当に!?日本の不思議をあばく！」

【ことば蔵賞】伊丹市、大地舞（おおち）さん（15）「たまご。 黄身と白身の出会い。そして別れ・・・。」

応募作品は、ことば蔵2階の「伊丹作家コーナー」に展示されている。

えおかみの気まぐれコラム
初めての飛行機にヒエー ～中国・佛山市への旅（上）

25年前のこと。パスポートが要るので一張羅のスーツで写真を撮りに行った。初めての飛行機、初めての長旅のため。でも今思えば一張羅を着なくてもよかった。必要なのは顔だけなのだから。

囲碁と食の出会いを目的に、伊丹市の国際友好都市、中国・佛山市へ。キャセイパシフィックで伊丹空港をいざ出発（当時は国際便が定期就航していた）。飛行機に乗るときの蛇腹のような渡り廊下がふわふわしていて怖い。私の座席はウィンドウシート（窓側座席）だ。飛び立ったらヒエーという感じ（心の中）でした。いわゆる高所恐怖症なのだ。

すぐに昼食タイム。気持ちが大きくなると思ってワインを飲んだが、窓の外を見下ろす勇気がなかなか湧かない。通路側に座った友人はビールで顔が真っ赤っか。伊丹から香港まで4時間弱だったかな。乗り換えて佛山市へ。飛行機の中だけでカメラのフィルムを1本使い切った。が、あろうことかそのフィルムを乗り換えのときになくしてしまった。

〈次号へ続く〉
（平きみえ）

十一杯目 酔後録

▼祝！申年（さるどし）
年が改まりましたが、皆様、年末年始は飲んでいましたか？拙者はご想像のとおり、まだフラフラです。

思えば昨年は、とことん日本酒にこだわった年だった。

家で飲むのも日本酒の比率がだんぜん高くなり、自然と燗（かん）をする機会も増えた。便利な燗専用の温度計も購入して温度管理に努めたものだ。物ぐさな拙者であるが、燗をつけている時だけは家族からマメだと言われる。しかし、昨年はよく飲んだ…。

▼日本酒LOVERS
日本酒の催しもたくさん参加したが、一番想い出に残っているのが「日本酒LOVERS 神戸」というイベントだ。会場の神戸サンボーホールに集まった800人の猛者が、ひたすら全国各地の日本酒を飲み続けるという趣向。

もちろん、拙者も開場と同時に入場し、制限時間いっぱいの4時間近く飲んだくれた。レアな酒の前には猛者たちが「まだか、まだか」と列をなす。会場内には日本酒の香りがたちこめ、酒に弱い人なら倒れるだろうと思われるほど。実に楽しかった。ぜひ、今年も！

▼サルと酒
サルに何か縁があるかな、とネット検索していると、「猿酒」なるものにヒット。なんと、サルが木の洞（ほら）や岩のくぼみなどに溜（た）め込んだ果実などが自然に発酵して酒になったものだという。猟師や木こりが探し求めて飲んだとか。どんだけ飲みたいねん、て感じだ。

皆様、今年も飲みすぎにはくれぐれも注意しながら、お酒をお楽しみいただきたい。申年に乾杯♪

（ときわ喜多）